

自治体イベントの経済学

桒森 隆一

文化とは、芸術とは、そしてイベントとは何か

文化人類学の祖と言われるアメリカのC. クラックホーンによれば、文化は私たちの生活に表れるものの見方や考え方、感じ方である。そのために生活全般に様々な文化（食文化など）がある。

では芸術とは何か。それは私たちの心が感じたものを何らかのメディアで他に伝わるように表現（ただしそれには技術・腕が必要）したものである。優れた芸術は私たちの心の感じ方の地平を広げる。

芸術文化とは、芸術が示した心の感じ方が、ある時間を経て私たちの生活に定着したものである。例えば、印象派の絵画は発表当時は酷評されたが、現在では私たち人類が共有する芸術文化の一部になっている。自治体が芸術文化イベントに関与するときには、このような文化と芸術の本質から生まれる効用とリスクを考えなければならない。

イベントとは定常的ではなく開始と終了のある事象のことを言うが、芸術文化イベントの効用を考えるとときには、全体性と継続性に着目する必要がある。全体性とは、イベントの開催期間だけでなく、計画段階、準備段階から終了後の事後処理までの全体をイベントとしてとらえることである。継続性とは、芸術文化イベントに何らかの効用が生まれるとすれば、それにはある程度の時間が（文化の性質上）かかるのであり、一過性のイベントについて効用を判断することはできない。

自治体芸術文化イベントの目的

文化芸術基本法第二条3項には「文化芸術を創造し、享受することが人々の生まれながらの権利である」とある。自治体の芸術文化イベントはここに定められた権利＝文化権を実現することを目的として実施する場合がある。その場合は芸術文化そのものの振興及び住民がいかに参加したか、ということが評価の対象となる。

しかし往々にして自治体の芸術文化イベントの目的は「地域の活性化」とされることが多い。活性化とは極めてあいまいな言葉である。地域が活性化しているとは地域がどのような状態にあることを指すのだろうか。それには二つのことが考えられる。一つは地域の経済活動が盛んであること、一つはコミュニティ活動が盛んであることである。このような目的であれば、そこに自治体を経済主体とする効用が生まれる。

地域経済活動の活性化

まず地域の経済活動の活性化について考えてみよう。自治体の芸術文化イベントがどのようにして地域経済活動の活性化をもたらすかについて、次のようなプロセスが考えられる。まず、イベントを目的とした来街者・交流人口の増大である。来街者は必ずその地域でモノやサービスを購入する。来街者が増えるほど購入は増える。それが、地域の商業・サービスの売り上げ増加をもたらす。

地域の商業・サービスの売り上げの増加は、新たな産業・事業所の増加をもたらす。増加した来街者への新たなモノやサービスの提供だけでなく、売り上げが増加した地域の商業・サービスにたいするBtoBの需要が見込まれるからである。これらにより、地域の産出額が増加するのである。

地域の産出額の増加はさらに経済波及効果をもたらす。

地域の産業・事業所の増加が進めば、次に来るのは定住人口の増加である。既存の商業・サービスの売り上げ増、そして新たな産業・事業所の増加は就労機会の増大を意味する。それだけではなく、芸術文化イベントが継続的に実施されると、その地域の魅力が向上する。つまり芸術文化の香りがする住みたい街というイメージができあがり、移住者が増加する。

産業・事業所が増え、人口が増えれば地価が上昇する。結果としてその地域の資本が増加する。増加した資本は税金を通して自治体によるインフラ投資に回され、あるいは商業・サービス企業の新規投資に回される。これが地域経済活動が活性化している状態である。

実際にこのようなプロセスを経て芸術文化イベントにより地域経済が活性化した事例として有名なのはフランスのナント市である。1980年代、ナント市は「寂れた工業都市」だった。1989年に市長になったジャン＝マルク・エローは芸術文化による都市再生を掲げた。ハード面での都市計画（工場や倉庫のリノベーションによる芸術文化拠点化）とともに、ラ・フォル・ジョルネ（クラシック音楽のフェスティバル）など芸術文化イベントを次々と開催し、フランスはもとよりヨーロッパ中から来街者が集まるようになり、それをあてにしてホテルやレストラン・カフェが開店した。市は観光地として活況を呈し、さらに2004年にはタイム誌の「ヨーロッパで最も住みやすい都市」に選ばれるまでになった。

自治体が芸術文化イベントによって地域経済活動を活性化しようとする場合、押さえておかなければならないポイントがある。まず第一に集客できるイベントだということだ。例えば2016年愛知トリエンナーレの来場者は約60万人、2018年の定禅寺ジャズフェスティバル（仙台市）の来場者は約72万人である。集客はその地域（自治体）ではなく広域で考えなければならない。定禅寺は東北一円から観客が訪れる。地域のみで考えた場合、そのイベントは地域の一般の人たちが興味を示すものに限られる。広域の集客を目指すのであれば、ジャンルは必ずしも地域の人たちの中に好む人が少なくても構わない。例えば現代美術が好きな人は地域にはほとんどいないが、全国で考えれば少なくとも60万人はいる。その場合、全国から集客するためにはアーティストや専門家（プロデューサー）が全国的に、あるいは世界的に著名である必要があるが、それは一般の人たちにとって著名という意味ではなく、そのジャンルで著名、という意味である。

二つ目に、客がお金を落とすところが必要だ。例えば「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018」は約55万人の来場者があったが、開催地域は新潟の田園地帯で宿泊施設や飲食など観光施設や商業施設が少なく、地域経済活動活性化の効果は限られる。その点、定禅寺ジャズフェスティバルの会場は仙台市の商業集積の中心であり、経済活動活性化に対してイベントの効果は大きい（だから主催者は地元の商店主が中心である）。つまり、芸術文化イベントによる経済活動の活性化にはあらかじめ受け皿となる商業やサービスの集積が必要だということである。もしそれらの集積が低迷していたとしても、来街者の増加により復活する可能性がある。もしそのような集積がない場合は経済活動の活性化はかなり困難になる。

三つ目に、いずれにしろ、地域経済活性化の効果が表れるには時間が必要だ、ということである。イベントが認知され、集客できるようになり、それが地域経済活動活性化のプロセスを始動しはじめるには、少なくとも10年～20年は必要だ。定禅寺ジャズフェスティバルが初めて開催されたのは1991年、72万人の集客を誇るようになるのに27年かかっている。

コミュニティ活動の活性化

地域の活性化は何も経済活動が盛んになることだけではない。自治体の芸術文化イベントによってたとえ経済活動が盛んにならなくても、コミュニティ活動が盛んになればそれも地域活性化に効用があるということができる。

コミュニティが希薄化している地域、例えば都市近郊の住宅地、あるいは中山間地域において芸

芸術文化イベントはコミュニティ活動の再活性化を生み出す可能性がある。それは越後妻有大地の芸術祭で見られるように、住民とアーティストが協働して作品を創造することにより生まれる絆によって生み出される。中山間地の過疎化・高齢化した集落では、年寄りがひきこもることによって、かつてあった集落の紐帯が薄れていく。祭りもなくなり、寄り合いも共同作業も少なくなる。芸術作品の制作に直接的・間接的に参加するということはそれ自体祭りのような非日常の体験であり、そこに感動と共感が生まれ、それが一度は疎遠になった人々を結びつけるのである。

芸術文化イベントによるコミュニティの活性化は、多様な地域活動の増加をもたらす。来街者のもてなしの活動や作品のメンテナンス、イベントをきっかけとした名産品づくりや集落の維持活動など、新たに生まれる活動はたくさんある。特に外部から来たアーティストやボランティアとの協働は、それまで地域の人々だけでは考えられなかったような新たな地域活動を生み出し、イベントが継続されれば活動も定着する。

さらに、多様な地域活動が増えれば地域活動への参加者も増加する。これまでの伝統的なコミュニティ活動にはそれほどの多様性はなく、しかも生産共同体的な活動は廃れていくものが多かった。そこに芸術文化イベントをきっかけにしてまったく新しい種類の活動が生まれ、そこに参加する人々も増えるのである。これも越後妻有大地の芸術祭で見られた現象である。

コミュニティ活動の活性化は多様な地域活動の増加や地域活動への参加者の増加を通して社会関係資本の増加をもたらす。社会関係資本とは、「社会的ネットワークとそこから生じる互報酬性（情けは人の為ならず）と信頼性の規範である」。アメリカの政治学者ロバート・D・パットナムの研究によれば、社会関係資本が十分に蓄積されている地域では、社会的費用が少なく済む、という。もし芸術文化イベントが地域の社会関係資本の蓄積に寄与するとすれば、それは社会的費用の低減を通して経済学的な効用をもたらす。なぜならば、互報酬性の規範は経済学でいう「取引コスト」を低減させるからである。

芸術文化イベントの評価

芸術文化イベントが地域活性化を目指すものならば、そのイベントが地域経済活動の活性化を目指すのか、それともコミュニティ活動の活性化を目指すのかを定める必要がある。地域経済活動の活性化を目指すのなら、その効用は前述したように地域の産出額の増加によって測定し、評価することができる。

なお、産出額の増加がもたらす経済波及効果については産業連関表を使って推計することができる。その方法を簡単に説明しよう。まず主催者の消費支出（イベント開催のための費用、会場費や制作費、広告費など）とイベント来場者の消費支出（宿泊、交通、土産・買い物、飲食、入場料総額）を調べる。これを合計したものが最終需要増加額である。これを分類し、産業連関表の各部門に割り振る（これを産業格付けという）。後は総務省の提供する簡易計算ツール¹の各部門に金額を入力すれば、自動計算により経済波及効果（但し一定の条件のもとでの一次効果）が金額として表示される。

コミュニティ活動の活性化を目指すのであれば、その効用は社会関係資本の充実に表れる。社会関係資本の充実度は関連する様々な指標によって測定される。ボランティアへの参加率や地域の地縁組織の加入率など、パットナムがいう「市民的積極参加のネットワーク」を表す様々な指標が考えられている。

注意しなければならないのは、いずれの場合も効用が表れて測定できるようになるまでには長い時間がかかることである。経済活動の活性化の場合、産出額がある規模にならないと評価の意味をなさない。

芸術文化イベントのリスク

文化芸術基本法はその前文で「我が国の文化芸術の振興を図るためには、文化芸術の礎たる表現の自由の重要性を深く認識し、文化芸術活動を行う者の自主性を尊重することを旨としつつ、文化芸術を国民の身近なものとし、それを尊重し大切にするよう包括的に施策を推進していくことが不可欠である」とうたっている。つまり自治体芸術文化イベントでは表現の自由を尊重しなければならないのは自明の理である。

しかしその場合、自治体は芸術の本質からくるリスクに直面することになる。まず第一に、前述したように芸術とは私たちの心の感じ方の地平を拓けるものである。すなわち、その時点で地域の多くの人々にとっては理解の範疇を超えた作品が出てくる可能性がある。

例えばイギリスを代表する現代美術家ダミアン・ハーストには、動物の死体を輪切りにしてホルマリン漬けにした作品がある。この作品はイギリスでも残酷で不快感を生じると非難されたが、この作品が評価されて芸術賞を受賞している。

音楽の世界でも現代音楽（十二音や無調音楽など）は一般には「わけのかわからない」音楽として聴く側を不安に陥れることがある。それを狙う楽曲もある。地域の人々の不評を買うこれらの展示や作品が、最先端の芸術として全国、あるいは世界規模で集客できるかもしれないとしたら、自治体はその不評を乗り越える必要がある。

二つ目のリスクは、芸術の持つ社会批評性である。芸術作品の中には、社会の矛盾や私たちの中にある潜在的な差別意識などを暴き出し、白日の下にさらすようなものも存在する。それもまた私たちの心の感じ方の地平を拓けるものである。資本主義の社会の構造的批判を内包する作品を発表する美術家ハンス・ハークとの対談で、社会学者ピエール・ブルデューは次のように言っている。

「あなたは、人間がほとんどひとりでゲームを破綻させ規則を崩壊させつつ、莫大な効果を作り出すことができるのだという証拠を示していると思います。それはしばしばスキャンダルというすぐれて象徴的な行動である手段を使ってなされました」。そして賛否両論がある政治的問題からくるスキャンダルに直面するのもまた関与している自治体なのである。

自治体芸術文化イベントでは、作品の質や芸術家の力量を評価する専門家（プロデューサー・芸術監督など）を必要とする。自治体にできることはイベントのコンセプトを明確にした上で、それを実現することができる著名で実力のある専門家を様々な観点から選定することであり、選んだ以上は専門家に任せてどんな場合も（生理的に不快な作品が選ばれたり、資本主義批判のような政治的立場を鮮明にしている芸術家が登場しても）バックアップしなければならない。従ってリスクをどこまで許容するかは、専門家を選ぶ段階で決まるのである。

最後に、あいちトリエンナーレの問題に触れたい。自治体は表現の自由を守らなければならないが、それは表層的なものではなく、フラットに個々の芸術作品の持つ「表現された意味」を等価なものとして扱い、それぞれを守らなければならない、ということである。

しかしそのためには、個々の芸術作品が等価なものとして提示されなければならない。その点では「表現の不自由展」が一つの等価な作品として成立しているか疑問である。なぜなら、「表現の不自由展」内の作品はそれぞれが別々の「意味」を持って表現されているからである。それを一つにくくって「表現の不自由展」という作品として見せることは、芸術監督の芸術に対する理解度の浅さを示していると思わざるを得ない。あいちトリエンナーレが何を誤ったのか、という問いに答えるとすれば、それは専門家の選定かもしれない。

ⁱ 総務省ホームページ http://www.soumu.go.jp/toukei_toukatsu/data/io/hakyu.htm